

# 防火帯づくりに利用

## 阿蘇の野焼きで実証実験

### 新日鐵住金の「カタマSP」



昨年9月に、内閣府の地域活性化総合特区「草原特区」に指定された熊本県阿蘇地域の、西湯浦牧野（阿蘇市）で約50年ぶりに野焼きが再開されることになり、6日、火入式があった。この野焼きでは、新日鐵住金(株)大分製鉄所（大分市）が開発した再生簡易舗装材「カタマSP」を防火帯などに利用する、実証実験が行われる。

たいまつを使い火入れをする蒲島知事（中央）や米田特任教授（右）ら

半世紀ぶりの野焼き再開で、約45畝の原野を草原に再生する。草原減少に歯止めをかける、草原再生のモデル的な取り組みとして、官民一体で支援している。建設業や林業再生に

取り組む米田雅子慶応義塾大学特任教授（建設トップランナー倶楽部代表幹事）も、内閣府の地域活性化伝道師としてこの活動を支援。米田教授は、防火帯づくり（輪地切り）の人的負担軽減と、防火帯持続のため、簡易舗装材の活用を提案。森林作業道などに多くの採用実績がある、大分製鉄所のカタマシリーズを紹介した。

金関係者は「野焼きの防火帯にカタマが使われるのは初めて。大分県内でも多くの地域で野焼きが行われているので、今回の実証実験がモデルとなり、草原維持・再生の一助になれるよう支援していきたい」と話していた。

火入式には、牧野組合のほか、蒲島郁夫熊本県知事、佐藤義興阿蘇市長、米田特任教授、新日鐵住金関係者などが出席。神事後、それぞれがたいまつを手に、火入れをした。この日はあいにくの悪天候で、野焼きはしなかった。（中園）

【メモ】カタマSP 新日鐵住金(株)大分製鉄所で製鉄副産物の高炉スラグと製鋼スラグを原料に開発した簡易舗装材。施工時に適度の散水と十分な転圧を行うことで、スラグ特有の潜在水硬性（水と反応して自ら固まる性質）などが発揮され、舗装表面から徐々に固化していく。